「無意識の言葉」の持つ怖さ

田坂　では、一つの方法を述べましょう。

「言葉」というものの怖さを理解して、使い方を工夫することです。

――「言葉」ですか・・・。

田坂　そう「言葉」です。

正確に言えば、**我々が日々、「無意識に使っている言葉」**です。

――なぜ、「無意識に使っている言葉」なのですか？

田坂　なぜなら、我々が日常生活において**「無意識に使っている言葉」こそが、我々の「無意識の世界」に浸透し、強く働きかける**からです。

逆に言えば、「無意識の世界」に直接的に働きかけようとして、言葉を「意識的」に使っても、先ほど述べたように、「無意識の世界」は「天邪鬼」ですので、その働きかけが逆効果になってしまいます。

従って、「無意識の世界に、直接的、意識的に働きかけようとする」のではなく、**「無意識に使っている言葉の怖さ**を理解し、その使い方を工夫する」ことが、一つの有効な方法なのですね。

――いま、先生は、「無意識に使っている言葉の怖さを理解し」と言われましたが、その「怖さ」とは何でしょうか？

田坂　**言葉というものが無意識に「世界を二つに分けてしまう」**ことの怖さです。哲学的に言えば、**「世界を分節化してしまう」**ことの怖さです。

（中略）

世界を二つに分けてしまう「心の機微」

田坂　ええ、例えば、会社の企画会議などで、田中君と鈴木君が、それぞれ、あるテーマについての企画案を出してくる。二人の説明を聞き終わった後、企画課長が、田中君を誉めて励まそうと思い、他意もなく、こう言ったとします。「田中君の企画は、なかなかセンスの良い企画だな・・・」。しかし、この瞬間に、必ずと言ってよいほど、鈴木君の心の中に「じゃあ、僕の企画は、センスの悪い企画なのか・・・」という思いが生まれます。

――　そうですね。会社においては、そうした心理も、よく生まれますね（苦笑）。

田坂　このように、いま述べた二つのエピソードは、**「言葉」と「心」の機微の怖さ**を教えているのです。

すなわち、「言葉」というものが、しばしば、「世界を二つに分けてしまう」ことの怖さです。**我々が無意識に使う「言葉」が、意図せずして、世界を「プラスの世界」と「マイナスの世界」の二つに分けてしまう**のです。「真と偽」「善と悪」「美と醜」「好きと嫌い」「優秀と劣等」といった二つの世界です。そして、その二つの世界のうち、「マイナスの世界」が、我々の「心」を、無意識に支配してしまうことの怖さです。

――　たしかに、そう考えると、**日常、何気なく使っている「言葉」が、我々の「心」に、思わぬ形で影響を与え、我々の「心」を支配してしまう**のですね・・・。それは、怖いことですね・・・。

田坂　その通り、実は、とても怖いことなのですね。

そして、さらに怖いことは、この**「言葉」と「心」の間で起こる問題が、そのまま、「表層意識」と「深層意識」の間でも起こる**ことなのです。

すなわち、「表層意識」が「世界を二つに分けてしまう」ことの怖さと、その結果、「マイナスの世界」が「深層意識」を支配してしまうことの怖さです。

――　なるほど、何か分かるような気がしますが、もう少し分かりやすく説明して頂けますか？

「誇り高き技術屋」の自己限定

田坂　では、分かりやすい例を述べましょう。

例えば、大企業などで、しばしば使われる言葉に、「技術屋」「事務屋」という言葉があります。一般に、大学の工学部や理学部などを出て、「技術職」として入社した人間を「技術屋」、法学部や経済学部などを出て、「事務職」として入社した人間を「事務屋」と呼ぶ習慣があります。

そのため、企業の会議などでは、しばしば、次のような言葉を耳にします。

「私は、技術屋ですから、この設計については、一言、申し上げますが・・・」

「私は、事務屋ですので、この契約については、意見を申し上げますが・・・」

こうした言葉は、どちらも「技術屋」「事務屋」としての誇りや矜持を感じさせる好感の持てる発言ではあるのですが、いま述べた「表層意識」と「深層意識」の視点から見ると、怖い問題が生まれてくるのです。

すなわち、「私は、技術屋ですから」という言葉は、**「私は技術屋ですから、技術については、それなりの見識を持っています」**という「肯定的な意味」を持った言葉なのですが、しかし、この「表層意識」が語った言葉の裏に、次の「深層意識」が生まれてくるのです。

「私は技術屋なので、契約などについては、よく分かりません・・・」

――なるほど、表層意識が語る「肯定的な言葉」の裏に、深層意識の「否定的な言葉」が隠れているのですね・・・。

田坂　そうです。すなわち、**我々が、表層意識で「ある能力を肯定する」瞬間に、深層意識では、「逆の能力を否定する」という心の動きが起こってしまう**のです。

例えば、「私は、数学は得意です」という言葉の奥に、「けれども、国語は不得意です」という思いが隠れていたり、「私は、営業に向いています」という言葉の奥に、「しかし、経理には向いていません」という思いが隠れていることが、しばしばあります。

そして、これが、まさに「自己限定の深層意識」となって、我々の能力の発揮を妨げ、才能の開花を抑えてしまうのです。